

# 宝の海から

## 白浜で出会った宝の海から

58

京都大学助教授 久保田 信(京都大学 瀬戸臨海実験所)

### 3大学連携シンポジウムに参加して

12月4日に沖縄島で、く見つかったいなかつ京都大学をはじめ、北海道大学、琉球大学のフィールド科学系の研究センターの関係者が集まり、第3回連携シンポジウムを開いた。日本は南北に長く多様な気候帯が存在する。この中で共通したテーマでそれぞれ研究されてお

興味深いことは、いつの時期にも2種が共存し、多数のポリプが多く見られる地点が、あるかと思えば、逆に、別の季節にもまったこの類が出現しない地点もあることが分かった。ポリプの共生が見られる地点でも、冬季の水温が

イガイが分布していないが、日本産2種とも共通の宿主として用いているカリガネエガイが分布している。この貝を、はじめ、沖縄島北部のクラゲは、あいかわら

ヨットが多数停泊しているマリナがある。ここからも、今回、複数のカイヤドリヒドラクラゲの群が発見された。ここは3年前に沖縄県衛生環境研究所の岩永節子さんや大城直雅さんやカキ類の分類の大家である鳥越兼治先生とともに、この種の世界初の宿主として沖縄生物学会誌(03年41巻)に記録したノコギリガキが採集できる場所

## 沖縄でカイヤドリヒドラ類調査

断する新たなフィールド研究の展開を目指す会なのだ。

低い場所では越冬できない集団があることも分かってきた。

類も調べた。どちらの二枚貝も、川が海に注ぎ、塩分がやや薄くなっている河口に多い。

太平洋岸に面した沖縄島中部の石川でも、カリガネエガイを採集して調べた。その結果、ここではカイヤドリヒドラクラゲが発見された。

瀬戸臨海実験所からは院生の小林亜玲さんと一緒に参加した。小林さんは2002年から日本海南部沿岸のカイヤドリヒドラ類の分布拡大と原因などについて研究を重ねており、次々と新しい発見をしている。

同シンポジウムでは、このような状況を過去の水温や対馬暖流の流向なども関連があるのか調べて、日本海南部海域へのこの類の分布拡大の由来と今後の見直しなども含めて説明した。

念ながらカイヤドリヒドラ類は、これらの二枚貝からも発見できず、東シナ海側の島の中部にある宮野湾では、豪華

発見したそれぞれの貴重な標本はいずれも群體ごとに貝から取り出してすぐにその場で薬品固定した。これらの標本は、今後、小林さんがさらに詳細な系統解析に用いる予定である。こうして分布調査と標本取得の目的、講演でのこの類の研究の進展の紹介などすべて予定通り順調にやれた。



沖縄島宮野湾のノコギリガキに共生するカイヤドリヒドラクラゲの群體



カイヤドリヒドラ類が宿主としてよく用いているカリガネエガイに共生するカクレガニの一種(上)と、寄生性の吸虫(扁形動物)

予定通り順調にやれた。